

書 評

Constance Brown Kuriyama: *Christopher
Marlowe—A Renaissance Life*
Cornell UP, 2002. xxi+255pp.

三 益 隆 一

マーロウ研究者として著名なコンスタンス・ブラウン・栗山のこの本は、詳細な「年代記」(クロノロジー)と「本体」と資料を集めた「付録」から構成されています。この種の伝記本に年代記が付いているのは当然という見方もあるでしょうが、大部な一次資料を集めた付録がついているということと併せ、伝記作者としての栗山の誠実さの証であるようにも思えます。それにしても、伝記本を書評するということはどのような意味をもつのでしょうか。あるいは、どのように書評するのがあるべき姿なのでしょう。しかし、幸いにも、栗山の伝記作者としての基本的姿勢は、イントロダクションにほぼ過不足なく明記されているので、そこを中心に彼女の立場と姿勢を紹介し、その是非について若干の考察を加えことから始めることにします。本体はその実践版なので、この伝記本の主要な特徴に関する限り、このイントロダクションの部分を読めばその傾向がほぼ理解できるのではと思います。

栗山は、伝記は事実と解釈、推論と推測、真実と神話の合成物であるとみていますが、クリストファー・マーロウ(以下誤解を生まない限りマーロウで通します)の場合におけるように、伝記的記録がセンセーショナリズムに濃く染められた場合あるいは染められる可能性が強い場合、仮説に基づくシナリオを

組み立て、推測を事実と混同する誘惑がますます強くなります。一例を挙げると、枢密院がケンブリジ大学当局宛に手紙を書き、マーロウは女王陛下のために「立派な働き」をしたのだから彼には予定どおり「修士号」が与えられるべきであると働きかけたことと、マーロウのパトロンの一人はトーマス・ウォルシンガム（Thomas Walsingham）だったということを根拠に、マーロウの伝記作者達はこれまで、彼のケンブリジ大学の長期欠席は政府の諜報関係の仕事をしていたせいであると結論づけてきました。しかし、マーロウの記録を他のケンブリジ大学の学生のそれと比較した場合、彼の出席パターンは格別異例というわけではなく、彼の長期欠席の一つは、明らかに、カンタベリーに住む彼の家族訪問に使われたことが証明できるというわけです。これは、さらに広範囲の証拠を考察した結果得られた、それほどエキサイティングではないが、はるかに妥当な結論である、と栗山は結論づけます。

特に、法的あるいは政治的記録文書は、肯定的よりも否定的結論を奨励する強い傾向を有します。「しかし、マーロウの29年の生涯のうち、最初の25年間は事件もなく過ごされているので、我々は、彼の生涯の最後の数年間を専ら基盤にしてマーロウのキャラクターを判断する代りに、既に彼の重要作品が生み出され始めていた最初の25年間、彼がどのような人間であったか、特に最後の16カ月の行動に明確な変化をもたらした原因は何なのかを、尋ねるべきだし、尋ねることは可能である」(3)。これが、マーロウの伝記作者栗山の基本姿勢ですが、極めて穏当で堅実な姿勢であり、特段異論のつけようはないように思います。このことを裏付けるものとして、栗山はモンテーニュの『エッセー』の一節を引用しています。

どんな行動にもわれわれの正体が現われるものだ。ファルサロスの戦いを指揮するときに示されたカエサル的心構えは、遊惰な恋愛の遊びに向けられるときにも同じように現われる。われわれは、馬が馬場で走っている姿ばかりでなく、並み足で歩いている姿を見て、いや、厩に休んでいる姿を見て、その値打を判断する。(6-7. 原二郎訳『エッセー I』. 筑摩書房. 1962. 218)

それゆえ、栗山は、新たな陰謀説を考え出すよりもむしろ、マーロウの生活

感を、彼が普通に体験したとおりに伝えようと努力します。その際栗山が基盤を置くのは、既に知られた記録文書はもとより、新しい記録文書や多くの二次的資料に及びますが、それだけでなく、カンタベリー、ケンブリッジ、ロンドンの、かつてマーロウがしばしば訪れた地に足を運び、時間をかけて歩き回って疑似体験することも含まれます。

栗山がマーロウの伝記を書くにあたり気をつけたことがもう一つあります。それは、記録文書に基づく多くの伝記作者が陥りがちなように、自分の議論が急に脇道にそれ脱線することを避けるために、この本の構成に非常な注意を払ったという事実であります。栗山はマーロウの生涯をまとまりごとに区分けしてそれを各章に割り当てています。こうすることで、マーロウ自身の視点から彼の生涯を提示したいという栗山の願望にある程度は適うことになります。冒頭にも述べたとおり、これに詳細な年代記と付録がつけられていますが、それは読者自身が自分で証拠を調べられるようにとの配慮からです。これだけの資料が一冊の本にまとめられて世に出たことはなく、長く待ち望まれてきたものであるとの栗山の自負は当然といえるでしょう。とはいえ、これまでマーロウの伝記研究に必要な基本的調査をしてきた先達たちに対する栗山の尊敬は、それによって増しこそすれ減るものではありません。なぜなら栗山は、自らの体験から、この種の伝記研究とその基盤となる記録文書の解読が、如何に多くの忍耐と時間と費用を必要とする作業であるかを熟知しているからです。そしてまた、栗山自身の解釈も将来のマーロウ伝記の作者達による修正を免れ得ないことを、特にそれがルネサンスに生きた作家とその時代について書こうとする者にとって、避け難い「危険」(リスク)であることをも、熟知しているからです。

以上、栗山自身の言葉を借りる形で紹介してきましたが、栗山のこの本にかける強い、しかし静かな意気込みとその基本姿勢は明白です。それはセンセーショナルな事件にもっぱら焦点を絞り、推測に基づいて大向こう受けする作家の伝記を目指す数多の伝記作者とは対極に位置する学者の立場です。ここまでくると、これは学問に対する姿勢というより、人間栗山の人生観や世界観に深くかかわることになるでしょう。本体を紹介するときそれが証明されていきま

すが、極めて堅実な、あるいは誠実な、そして暖かさの伝わる、研究と人間にたいするまなざしがここにはあります。かつて『言語文化論叢第2号』でわたし自身が書評したマーロウ没後400年記念論文集（Darryll Grantley and Peter Roberts (eds.) *Christopher Marlowe and English Renaissance Culture*. Scholar Press. 1996）の各論文と読み比べてみると、一段と栗山のこの本の特色が分かります。むろん学会発表の14編の原稿を元にした論文集と一人の学者の生涯をかけた一冊の伝記本を同一のレベルで論じることにはできませんが、論文集にみる危うさは基本的に栗山の本にはありません。物事は何でも両面の見方があり、栗山の本に物足りなさを感じる方もおられるかもしれません。その辺のところは本体を検討する過程で再度考えてみるつもりです。

「カンタベリー物語」と題された第1章は、マーロウの家族と彼の子供時代について書かれています。靴職人としての修業を修めた父ジョン・マーロウ（John Marlowe）と牧師の娘キャサリン・アーサー（Katherine Arthur）との出会いと結婚、そして二人の間に9名の子供が生まれたが、そのうち4人は、無名の赤子も含め幼くして次々死んだこと、クリストファーは第2子の長男でしたが、姉が2歳たらずで死亡したので彼が最年長の子供になり、その12年後に弟が生まれて生き残るまで、ただでさえ男の子供が大事にされ特権を与られていた時代ですから、大切に期待をもって育てられたことが指摘されます。ですが、そのことは、この時代に生まれた子供が無事育つということがいかに難しかったかということの意味してもいます。マーロウの子供時代ペストが猛威をふるい、なかには家族全員死に絶えた家も少なからずあり、この時代のカンタベリーに限ったことではありませんが、広くヨーロッパ全体を見渡した場合、ペストは何度もヨーロッパのどこかの町で猛威をふるい、町の人口の多くが消滅しました。実際、14世紀から16世紀にいたる200年のあいだ、人々の意識は、死につなぎとめられていました。ペストがもたらしたものは、たんに人口の消耗だけにとどまらない。なによりもひとの心になげられた、暗く、恐ろしく、狂暴で、容赦しない、死の影が、マーロウ家を含むカンタベリーの人々を覆い尽くしていました。かくして、マーロウは、「ルネサンスの他の子供たちと同様、命のはかなさについて思いをめぐらす十分な機会をもった」(17)と思

われます。当然、死の影は、彼の作品の中にも強調されて取り上げられます。もっとも、それはルネサンスのいわば闇の部分の話で、当然ルネサンスには光の部分もあります。ルネサンス教育の典型としてのグラマースクールの教育は徹底した言語教育とその背景をなす文学にたいする深い関心と尊敬を生徒に植え付けた、と栗山は言います。ルネサンス・ヒューマニズムは個人の尊厳や可能性を重視しましたが、教育が重視され識字率が高まるにつれ、人々は自分を他のひとびととは違う特殊な存在として意識し、自分の名誉や誇りを何よりも重視するようになりました。「名誉や名声は成功の同義語となり、したがって名誉や名声を否定され辱められ嘲られることは、自己抹殺を意味しました」(30)。この意識は職人や徒弟にまで及び、ある意味ではかれらにこそ徹底し、「ルネサンスは、徒弟の一人一人が、自分の名誉を守るために喧嘩に及んだ時代であった」(30)、と栗山は指摘しています。このことは、マーロウ自身の喧嘩沙汰とからめて、後ほど取り上げます。このようなルネサンスの時代精神を表わす言葉として、栗山は「ナルシシズムのほうがより便利な言葉である」(31)とみなしています。精神分析的手法に立ち、例えば『タンバレイン』をホモセクシアリティの視点から分析しようとする栗山の研究姿勢の一端がここにはかいまみれます。しかし、それよりも重要なことは、栗山が、マーロウの伝記を常にルネサンスという時代と精神との関わりにおいてとらえようとしていることで、当然といえはいえますが、この本に“A Renaissance Life”というサブタイトルがつけられている所以はそこにあります。これはこの本における栗山の一貫した姿勢です。20世紀初頭のマーロウの伝記作者は、彼の作品に描かれた暴力を説明するために、エリザベス朝のカンタベリーにおける日常生活の暴力をしばしば強調しますが、それは簡単に割り切りすぎた説明であり、実際マーロウのカンタベリーは、シェイクスピアのストラッドフォードはもちろん、ベン・ジョンソンのロンドンと比べても、格別暴力的な都市というわけではなかったこと、カンタベリーはマーロウに、心理的よりも知的、美的に影響を与えたのだ、と栗山は指摘しています。この本におけるこの第1章のページ数の多さから言っても、カンタベリーの日常生活に潜む死の恐怖と生の尊厳からマーロウが想像以上に大きな影響を受けたと、栗山が考えていることは明らかです。

第2章と第3章は、栗山の言葉では、「ケンブリッジにおける大学および大学院教育と、詩人としての彼のキャリアを維持するための資金問題」(7)が扱われています。1580年の11月末か12月初旬マーロウは家族に別れを告げ、まだ、奨学金が手に入るのを待ちきれないように、一躍ケンブリッジへと旅立ちます。ケンブリッジでは、やがて『パリの虐殺』に登場するラムス(Ramus)を知りますが、栗山によれば、マーロウは、思想家としてのラムスよりも人間としてのラムスに興味を引かれたので、その理由はラムスが、貧しい家庭に生まれながら、学者として華々しい成功を収め、アリストテレスの権威に挑戦しプロテスタントに改宗した知的反逆者だったからです。一方、マーロウは、「聖職者たちの大部分が、過剰な仕事をしながら惨めなほど不当に低い給料しか払われていないこと、靴職人に比べればはるかに高い社会的地位を享受しながら給料の点ではその靴職人にも及ばないこと、そもそも教会のポストそのものが沢山はない」(51)という現実も知ります。マーロウが奨学金をもらいながら、結局聖職につかず演劇の世界に身を投じた理由の一つはここにあるかもしれません。あるいは、『フォースタス博士』を中心とするマーロウの作品に聖職者に対する侮辱がしばしば描かれる遠因がここにあるのかもしれません。わたしは、今意識してマーロウの実人生と作品を結びつけてみたのですが、栗山のこの本にはこのような議論はほとんどありません。上にラムスと『パリの虐殺』の関係について触れましたが、作品との関係を挙げるとしてもこの程度のもので、これは徹底しています。最後にまた触れるつもりですが、栗山の伝記は終始一貫して、人間マーロウの領域にとどまっており、それが作品とどうかかわるかはこの本では、敢えて言えば、関心の外に置かれています。良くも悪くも、そこにこの本の大きな特色があります。

第3章では、ディベートを中心とする当時のケンブリッジ大学の教育や教科の特色、大学時代に知り合った後の劇作家トーマス・ナッシュ(Thomas Nash)のこと、同じく大学時代の友人 ジョン・ベンチキン(John Benchkin)のこと、それにマーロウに対する誹謗書で有名なリチャード・ベインズ(Richard Baines)等について書かれています。特に最後の二人についてはその記述は詳細を極めます。ベンチキンについては、ジョンの母親キャサリン・

ベンチキンの遺言書にマーロウ家にかかわる複数の人間が署名しています。これによってマーロウの自筆署名が残ったわけですが、なぜ彼らがそれに署名するにいたったかの経緯が詳しく述べられ、結果として、マーロウのこの前後の行動が確実に裏付けられることになります。イントロダクションでも紹介したように、マーロウがケンブリッジを留守にしたのは、彼が国家の諜報機関の格別に重要な仕事をしていただけではなく、長い休暇を利用して家族を訪ねていたからであり、その途中友人のベンチキンの相続問題のために人肌脱いだことを示す、栗山にとっては第一級の資料というわけです。栗山によれば、ウォルシンガムの配下にあって、国家の安全保障に関わるような機密情報を扱う仕事は、絶対的な忠誠心を必要とし、巧妙で経験豊かで冷酷なプロの諜報部員のすることであって、M. A. の学位をとったばかりの学生の出る幕ではなく、マーロウに修士号を与えるようにとのケンブリッジ大学当局宛に出された枢密院の手紙にあるように、仮にマーロウが女王陛下のために立派に働いていたとしても、せいぜい、手紙の運び屋だったろうと結論づけています。リチャード・ベインズについては、その誹謗書について言及する際後ほど触れざるをえませんので割愛しますが、ここにはマーロウと関わりをもつにいたるまでのベインズのことが、おおよそ6ページにわたって実に詳細に述べられています。第4章については2点だけ簡単に紹介し注釈するにとどめますが、その一つはマーロウも関わる喧嘩沙汰で、第2は通称「夜の学校」(School of Night)に関わる件です。「1580年代の終わりから1590年代の初めにかけて、マーロウは、ロンドンにおいて、もっとも賞賛され、羨望され、広く模倣された劇作家でした」(81)。ところが、この間のおよそ7年間に、マーロウは2度の喧嘩にまきこまれています。まず最初の喧嘩は、1589年9月18日午後2時から3時に起こりました。栗山は、この件については、マーク・エクリーズ(Mark Eccles)によって発見された二つの記録文書に情報の大半を依存していることを認めています。この報告によれば、マーロウとウィリアム・ブラッドレー(William Bradley)なる人物が喧嘩をしているところに、騒ぎを聞きつけたトーマス・ワトソン(Thomas Watson)が抜き身の剣を手に分けて入ったところ、マーロウはすばやく喧嘩をやめ身を引いたにもかかわらず、ブラッドレーの方が

「今度はおまえが相手か」とワトソンに襲いかかり傷をおわせたので、身の危険を感じたワトソンが反撃したところ、ブラッドレーの右胸の乳首の下あたりに致命傷をおわせ、その結果ブラッドレーは即死したことになっています。栗山はこの事件の原因を中心に、当事者の交友関係等、およそ6頁にわたって詳細な検討を加えています。それによって、マーロウの交友関係だけでなく、さまざまなルネサンス期のロンドンの生活が浮き彫りにされ、ここでもこの本のサブタイトルに恥じない分析がなされています。特に7章の喧嘩沙汰を考える際に大きな参考となるでしょう。

この章のもう一つ重用と思える問題は第9代ノーザンバランド伯（Ninth Earl of Northumberland）とサー・ウォルター・ローリ（Sir Walter Raleigh）によって庇護された、科学者や劇作家の集団の問題です。通称「夜の学校」といわれたここにはさまざまな若き科学者や劇作家が集まりましたが、かれらは噂されたような無神論者だったわけではなく、マーロウが唯一それに該当するとしても、緩やかな意味での無神論者でしかなかった、と栗山は指摘しています。

第5章では、前半でマーロウとストレンジ卿（Lord Strange）及びトーマス・ウォルシinghamとの関係について、後半では、第7章でマーロウの喧嘩相手として登場するフライザー（Ingram Frizer）について書かれています。前半に関し1点だけ紹介しておけば、反逆罪の嫌疑をかけられたストレンジ卿に監視がつくようになり、そのからみでストレンジ卿一座のために同じ部屋で芝居を書いていたマーロウとキッドの部屋も搜索されます。ここで、年代記で2年後のことを言えば、キッドの部屋で発見された「キリストの神性を否定する」趣旨の文書を、「これは2年前一緒に仕事をしていたとき紛れ込んだマーロウによって書かれたものである」(98)とキッドが主張したことになっています。その結果、キッドは逮捕され投獄されますが、マーロウは枢密院に毎日出頭するように命令されただけですみます。この二人に対する当局の対応の違いから、またしても、マーロウは諜報関係の仕事をしていたからだという議論があります。栗山はこの間の経緯をしるしたキッドの手紙に関する問題を第7章でも第8章でも取り上げて、キッドがそのような行動に出たのは、キッド本人がずる賢い

不誠実な人間だったからではなく、むしろ真面目なキッドにとってマーロウは不可解で幾分不快な同室者だったのだと推察しています。このように、栗山はマーロウ以外の人物の場合も、むしろマーロウの生涯にからむという思いからでしょうが、事件が起きた時点だけでなく、そこにいたるまでのそれぞれの人物の日常生活を丹念に描くという姿勢を貫いています。俗に言う誹謗書を書いたキッドに対するこのような栗山の態度には、人間を判断するに際してのまなざしの暖かさが感じられます。そのことは後半で描かれるフライザーに関して言えば、金銭面ではずるがしこく無節操な面はあるが、彼との交際で利益をあげたひとびとは、フライザーを高く評価しており、概して言えば、暗殺者とは程遠い人間である、と栗山は指摘しています。いずれにしろ人間を判断・評価することによって栗山本人が判断されます。ここが重要なところです。

第6章は、やがてマーロウを襲う過酷な運命を知る由もなく、彼の運勢がこれまでにないくらい輝いているように見えた1592年を中心に書かれています。もっとも、その輝きは1592年の前半までで、後半の6月から10月にかけて、またしても疫病流行のせいで、枢密院は劇場閉鎖の公布を出し、マーロウの生活にも陰りが見えてきます。それだけでなく、異変の兆候は、彼が通貨偽造の嫌疑で逮捕されたことで、一段と深まります。ここでベインズの誹謗書が登場することになります。ベインズのマーロウに対する誹謗書の内容、偽金造りとか、無神論者だとか、同性愛者だといった類の中傷は、今日からみれば与太話のように思われますが、当時はそれなりのインパクトをもっていたことは確かでしょう。栗山は「ベインズとマーロウがヒューマニスト教育の産物で、共に自分たちの優れた才能が不当に低く評価されているとみなしていた点、権威に対して敵意をいだいていた点、危険や陰謀を好んだ点等から、少なくとも一時期、同好の士であったことを自覚していただろう」(110)と指摘しています。しかし同時に、ベインズはマーロウに対して恐怖感をいだいており、マーロウはベインズが彼に悪意をもっていたことを自覚してもしました。ベインズの誹謗書について語るとき、このような両者のアンビヴァレントな相互関係を無視するわけにはいきません。

第7章の大きな主題あるいは事件は、喧嘩沙汰にともなうマーロウの突然の

死です。この本にはマーロウ本人が間接的にかかわるもう一つの喧嘩沙汰が詳細に取り上げられていることは既に見たとおりですが、このマーロウ最後の、そして最大の事件の描写はそれに優るとも劣らず詳細を極めます。栗山が伝記作者としてその本領を発揮した鮮やかな手際を見るためにも、詳しく紹介することにします。

マーロウのような将来を嘱望された若き劇作家が巻き込まれた喧嘩沙汰とその結果としての突然死の状況や原因の追及は、伝記作家ならずとも、魅力的な主題です。初期の伝記作家は、道徳的観点から、神の罰がくだったのだと解釈しましたが、最近の批評は、単純な答えよりも複雑な答えを好み、時代や文化を反映する理論を支持します。事件を起こすのは神ではなくて人間であるというわけです。こうして、あることないこと、政治的陰謀やスパイ組織や詐欺行為や多様なセクシャリティの物語がマーロウの伝記本に目立つようになります。栗山は、しかし、毅然としてそれらを退けます。「われわれは、マーロウの死に関して、もっとも独創的な、あるいは扇情的な、あるいは刺激的な説明ではなく、真実もっともありそうな説明とは何かを尋ねるべきであろう。これが、この章でわたしが考察しようとした問いであるが、むろん絶対的な答えが提供できるふりをするつもりはわたしにはまったくない」(121)と述べて、この章にかかる意気込みと決意を、披露しています。

事件は、1593年5月30日、デットフォードで起きます。マーロウの死に関する検視官の報告書を発見したレスリー・ホットソン (Leslie Hotson) のおかげで、この日殺人事件の現場となったデットフォードの寡婦エリナー・ブル (Widow Eleanor Bull) の店に居合わせた客の中で事件の関係者は、イングラム・フライザーとニコラス・スキアズ (Nicholas Skeres) とロバート・ポウリー (Robert Poley) とマーロウ本人の4人であったことが分かっています。彼らはこの店での食事会に集まったらしいのですが、検視官の報告によれば、その日2度目の食事となった夕食後、マーロウとフライザーの間で勘定をめぐる激しい口論が起きたことになっています。この口論は一旦おさまり、マーロウは長椅子に身を横たえ、フライザーはマーロウに背を向けて椅子に座っていたところ、突然先ほどの口論のことを思い出したか、興奮したマーロウが、フ

ライザーの腰につけた短剣をつかみとり彼の頭に二箇所傷をおわせたのが事件の発端です。身の危険を感じパニック状態に陥ったフライザーは、必死の思いでマーロウから短剣を取り戻そうと争っているうちに、マーロウの右目の上に致命傷を与え、その結果マーロウは29歳3カ月にしてその生涯を突然閉じることになります。これが事件のあらましですが、最近の伝記作者は、3人は虚偽の証言をしており、マーロウは暗殺されたので、検視官の報告は隠蔽工作された可能性があるともみます。栗山はそうした見方を拒否し、その根拠となる論を詳細に展開しています。マーロウの死を望んでいた者が、ベインズ以外に多くいたとしても、望むだけでなくそれを実行に移した者がいたという「直接的証拠」(direct evidence)がない限り、推測の域をでないと栗山は主張しますが、本当らしく思えるといって本当であることには必ずしもならない以上、愚かな推測や空想的な理論はまったく信頼性を欠く以上、暗殺説や陰謀説を検討し、その根拠にゆさぶりをかける栗山の立場に異をとることは困難です。メロドラマ仕立てを好む伝記作者がとる暗殺説や陰謀説の場合、フライザー、スキアズ、ポウリーの3人は一癖も二癖もある悪人の様相を呈します。しかし、栗山はその可能性自体を否定します。栗山も、フライザーとマーロウが諜報機関の元締めフランシス・ウォルシンガムの親族の一人、トーマス・ウォルシンガムのために働いていたことは認めています。フライザーとマーロウは旧知の間柄で、マーロウはある面ではフライザーの能力を賞賛していたと述べています。それに、マーロウとフライザーが勘定書きのことで喧嘩沙汰に及んだという状況は、それ以前1年半のあいだマーロウが置かれていた精神的に不安定で腹立たしい状況と一致します。さらに、疫病が依然としてロンドンで猛威をふるい、劇場が閉鎖される一方、枢密院からの出頭命令を待つ身だったマーロウにとって、ロンドンの南3マイルに位置するテムズ川河畔の小さな港町デットフォードは一日ぶらぶらして時を過ごすには便利で快適な場所だった、と栗山は解釈します。一般的に、エリザベス朝の人々は些細なことで素早く喧嘩に及んだともいいます。では、喧嘩の真の原因は何か。栗山は、角度をかえ、マーロウ自身に原因がなかったかどうかを見ようとします。上に述べたように、劇場閉鎖と枢密院からの召喚によって自由に動けなくなったマーロウがいつも以

上に金に困っており、数シリングでも些細な問題ではなかった可能性があります。フライザーがマーロウを食事に招待しておきながら勘定の一部を支払うように急に求めたとすれば、しかも、食事をしながら二人が相当に酒を飲んでいたらとすれば、フライザーの申し出がマーロウを怒らせたことは十分考えられます。検視官の報告によれば、二人は、他の客に聞こえるほど大声でお互いを罵りあったとあります。このような状況のもと、マーロウに背を向けて座っていたフライザーの腰の短剣が、マーロウほど激しやすすくない者にとっても、誘惑的に映ったであつたろうことは容易に想像できます。マーロウがフライザーの頭部に加えた傷は剣の柄によってなされたもので、浅い傷だったという見方がありますが、いずれにしろ、こうして事件は起きました。検視官の報告について批評家は、事件の目撃者・証人がフライザー、スキアズ、ポウリーの3人だけだったとみますが、栗山は、店内の他の客に聞こえるほどの口論をしている以上これは正確ではないと考えます。昔も今も事件に巻き込まれたくないという群集心理は存在したでしょう。それにしても、マーロウが計画的に暗殺されたとする場合、このような人目につく場所が何故選ばれたのか、暗殺するならするで他にもっと暗殺に適した場所がいくらでもあるではないかと栗山は指摘しますが、もっともな考えです。4人のうちで最も攻撃的な人間はマーロウだったということも、おそらく事実でしょう。では、このような結論がなぜ受け入れ難いのか。おそらくわれわれは、さっそうとした時代の寵児マーロウがこのようなたわいない理由で他人を攻撃出来たという事実を認めたくないのだろうが、上でみたように、この1年あまりマーロウが体験していた一連の困惑をもたらす逆境を考慮に入れると、これ以上に真実に近いと思える理由はないだろう、と栗山は結論します。そのうえで、「不幸なことに、作家や芸術家の生涯は、その作品と同じほど、非凡で賞賛に値するものでは決してないのです。それどころか、われわれと同じように、彼らもまた、取るに足らぬ、間違いを犯しやすい、短気な人間であるばかりか、われわれとまったく同じように、愚かにも自分の生涯を無駄に使う可能性・危険性を持ち合わせているのです。おそらく今後もマーロウの死に関して空想にみちた説があることないこと語られ続けていくでしょうが、その理由は、彼らに生まれつきそなわった天分は別とし

て、それ以外の点では、他の人間より良くも悪くもない同じ人間であることを、われわれが認めたくないからなのです」(140)、と栗山は主張します。8章、9章は、マーロウの死後、同時代および後代の人々にマーロウがどのように評価されたかについて書かれていますが、既に長くなりすぎたこと、7章以前の分析の勢いに欠けるように思えること等の理由で省略することにします。その代わりに、これまで検討してきたことを元にこの本の特徴を箇条書き風にまとめ、それに若干の結びの言葉をつけて終わることにします。以下は人を判断する時何が大事かという問いの回答にもなるでしょう。

- (1)伝記は事実と推測の合成物だが、事実あつての推測である。陰謀説や暗殺説を好むのは20世紀の傾向だが、あくまで証拠に基づいて判断することが肝要。
- (2)異常時の言動も大事だが、むしろその人の平時の言動に注目する。特に、幼少時の家庭環境、教育環境、時代思想や雰囲気には要注意。
- (3)作品と作家本人の評価は切り離す。作品が如何に優れていても、人間としての作家本人を作品の評価とからめて偶像視しない。
- (4)作家を描くことによって時代を描く、時代を描くことで作家の生涯が浮き彫りになるような伝記を目指す。ルネサンス・イングランドの光と闇との関わりのなかで人間マーロウの自己成型を描く。
- (5)人間としての作家の伝記を描くことに徹し、作品との関わりは、目指さない。特に、人間マーロウの交友関係・人間関係に注目し、その「関係」(relation)をもとにマーロウの自己成型の物語(relation/story)であるような「伝記」(biography)の完成を目指す。

参考までに、*TLS* の書評でマイケル・ケインズ (Michael Caines) は、栗山のこの本を以下のように評価しています。

“the real value of her book lies in the prevailing scepticism with which she treats her subject: the documentary evidence and the conspiracy theories favoured throughout the past century. We must not, she says, mistake the surviving parts for the lost whole ; nor must we rush to make an extraordinary man out of the ordinary conditions of his

times.” (TLS. September 20 2002 No 5190)

因みに、この TLS で同じ評者により紹介されている Lisa Hopkins の *Christopher Marlowe: A literary life* は、サブタイトルも示唆するとおり、伝記と絡め作品の主題の形成を重視しており、関心の置きどころが違います。

以上、こうして、ある点ではいささか強引にマーロウ伝記としてのこの本における栗山の視点・立場をまとめてみると、結局のところ、テキストとヒストリーのダイナミックな相互乗り入れを目指す新歴史主義の大きな枠組を借りながらも、これまで検討してきたことから十分明らかなように、際者狙いの危うさも画一さありません。膨大な記録文書を探索し、あくまでも冷静に、そして徹底した資料の解読作業を基盤にしたマーロウと彼を取り巻く人物像解明への執念、それは時に事件の現場を重視し足で裏付け捜査をする刑事の作業の様相をおびることさえありますが、とはいえ、マーロウと彼を取り巻く人物達を見つめる栗山のまなざしには暖かさが感じられます。わたしはそこにモンテニユの思想の影響を見ますが、伝記作者としての栗山の魅力はその点にあるとする見方もあれば、逆にそこに限界があるとする見方もあるでしょう。また、所詮栗山が提出したマーロウ伝記のいわゆる事実の部分は、過去の伝記作者たちが提出してきた事実と殆ど変わらないとして、栗山のこの本を評価しない向きもあるでしょう。一番の問題点は、こうして浮き彫りにされた極めて日常的・現実的なマーロウ像が、その作品に描かれた非日常的・超現実的な人物像と重ならないという点にあるかもしれません。しかし、わたしの見方は些か違います。日常的世界に生きているからといって非日常的世界が描けぬわけでもないと思うからです。それどころか、当事者が非日常的世界の渦中にある場合、物語の主人公にはなりえても語り手にはなりえぬ場合も多々あるでしょう。諜報活動一つ考えてみても、マーロウが生きたルネサンスは、日常的世界のなかに非日常世界が混在していた時代でした。肝心なのは、日常的世界に潜む非日常的要素を見抜きそれを作品化するだけの想像力と創造力を持っているかどうかです。マーロウにはそれがありませんでした。

わたしは、栗山のこの本から、マーロウの伝記に関するさまざまなことを学びましたが、そこからさらに、歴史や文化との関わりにおいて自己を成型する

ことの、あるいは自己を認識することの意味と、一般に他者を判断し評価することの意味についても、考えさせられました。最後にそのことを確認して終わることにします。

（書評としては些か長すぎる本論は、関西シェイクスピア研究会2003年2月例会での評者の発表原稿に基づくものである。その後評者は『関西シェイクスピア研究会会報第24号』におおよそ七分の一に短縮した書評を掲載している。）